The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ドイツ革命とゾルフ ： 帝国の終焉から新生共和国へ
Author(s)	中村, 綾乃
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2021, 2020, p. 21-34
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/85039
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ドイツ革命とゾルフ
――帝国の終焉から新生共和国へ――

中村綾乃

1 はじめに

第一次世界大戦末期の 1918 年 10 月、マクス・フォン・バーデン（Maximilian von Baden）を宰相とする内閣が成立する。この戦時内閣において、現職の植民長官であったゾルフ（Wilhelm H. Solf）は外務長官に任命された。マクス公の回顧録によれば、ゾルフを抜擢した理由は以下の通りである。

まず一つ目の理由は、ゾルフ氏はその力強い演説の中で、道徳的な帝国主義と合意の上での平和の実現を標榜しており、敵国の耳目を惹くことができるからであった。二つ目の理由は、彼を任命することで植民地の法的権利を示威的に主張するためであった。「植民とはミッションである」はもともと彼の座右の銘であり、口先だけのことではなかったのである。彼はサモア総督、また植民長官としても模範となる人道的精神と堅実さを示しており、それは敵国でさえも認めるところであった[1]。

1918 年 7 月以降、ドイツ軍の前線は後退し、敗色は濃厚となっていた。8 月、参謀本部のルーデンドルフ（Erich Ludendorff）は皇帝のヴィルヘルム二世（Wilhelm II. ）に休戦のための交渉を進めるよう迫った。前線にいた兵士の士気は低下する一方、国内では革命の機運が高まっていた。マクス公は早急に休戦交渉を進め、植民地問題で有利な条件を得るためにゾルフに白羽の矢を立てたのである。なおゾルフは、帝国の外務長官として、ツィンマーマン（Arthur Zimmermann）に次ぐ二人目の市民階級出身者であった。

マクス公内閣の成立から一月を経ずして、北部ドイツのキール軍港の水兵が蜂起し、ドイツ全土に暴動が広がっていく。11 月 9 日、首都ベルリンで革命が勃発する。マクス公は皇帝およびプロイセン王としてのヴィルヘルム二世の退位を宣言し、多数派社会民主党のエーベルト（Friedrich Ebert）に政権を委ねた。エーベルトの要請を受けて、ゾルフは外務長官兼植民長官として留任する。しかし 12 月 9 日、独立社会民主党との対立をきっかけとして外務長官を辞任する。帝国最後であり、共和国最初の外務長官としての在任期間は二カ月であった。この間、ゾルフは連合国との休戦交渉を担う一方、帝国から新生共和国への橋渡し役を務めようとした。

この橋渡し役としての経験と挫折は、ゾルフの政治構想にどのような影響を与えたのであろうか。本稿では、ドイツ革命時の外務長官としてのゾルフの事績を跡づけていく。ゾルフの事績を通して、植民地帝国としてのドイツ帝国、第一次世界大戦、革命から新生共和国へ、共和国の混乱と崩壊、日独関係を描くことが今後の課題である。

ゾルフに関する先行研究と史料について付記しておく。ゾルフが死去してから 25 年後、フィーチ（Eberhard von Vietsch）による伝記が刊行された[2]。この最初の伝記が世に出てから約 40 年後、ヘンペンストール（Peter J. Hempenstall）とタナカ・モチダ（Paula Tanaka Mochida）によって、二冊目の伝記が刊行された[3]。ゾルフの個人文書は、ドイツ連邦文書館に所蔵されており、フィーチによって史料目録が作成されている[4]。またフィーチは、ゾルフと元駐英大

---

[1] Max von Baden (2011), *Erinnerungen und Dokumente: Reihe Deutsches Reich VIII/I-II*, Hambug: Severus Verlag, S. 36-37. マクス公の回顧録の初版は 1927 年に出版されたが、本稿では上記の復刻版を参照。

[2] von Vietsch, Eberhard (1961), *Wilhelm Solf, Botschafter zwischen den Zeiten*, Tübingen: Wunderlich.

[3] Hempenstall, Peter J / Mochida, Paula T. (2005), *The Lost Man-Wilhelm Solf in German History*, Wiesbaden: Otto Harrassowitz Verlag.

[4] von Vietsch, Eberhard (1961), Nachlass Wilhelm Solf (1862-1936), BArchK, N1053.

使のメッテルニヒ（Paul Wolff Metternich）の往復書簡を編纂している[5]。フィーチによって先鞭づけられたこれらの先行研究に依拠して、筆者は植民地行政官としてのゾルフの事績を跡づけ、彼の植民地構想を分析した[6]。

２　帝国の終焉

ヴィルヘルム二世の回顧録

革命から 4 年後の 1922 年、亡命先のオランダにいたヴィルヘルム二世は回顧録を出版した[7]。同書の「戦争の終結と退位」と題する章でゾルフが登場する。まず、ヴィルヘルム二世の回想に沿って、ゾルフとの対話を描き出していく。時計の針を 1918 年 10 月に戻してみよう。

謁見に訪れたゾルフに対して、ヴィルヘルム二世は米大統領のウィルソン（Woodrow Wilson）に宛てた覚書の草案について尋ねた。この覚書は、ゾルフが中心となって起草したものである。ゾルフの戦略は、ウィルソンを介して連合国との休戦交渉に持ち込むというものであった。ヴィルヘルム二世は、ウィルソン宛の覚書の草案についてゾルフから説明を受けた後、国内で皇帝退位の噂が広まっていることに言及した。ドイツの体面を傷つける新聞紙上の論調に対して、外務省として抗議するよう要求したのである。上述の回顧録には、この時の自らの葛藤とゾルフと交わした言葉が綴られている。

ゾルフは、それ（引用者註：皇帝の退位）について市中の街角で誰もが口にしておりますと、上流階級においても躊躇することなく議論しておりますと答えたのである。怒りを露にした私に対して、ゾルフは慰めの言葉を口にした。陛下が去るのであれば、彼もそうします、このような体制下で職務を遂行することはできませんと言った。自ら去るか、いっそのこと、この内閣によって失脚させられようか。しかし結局、ゾルフ氏は留まったのである[8]。

1922 年 10 月 31 日付の大衆紙『ベルリン日刊新聞』*Berliner Zeitung am Mittag* は、この回顧録の論評を掲載している。この論評では、回顧録に記された内容、特にゾルフが登場する下りについて、真偽を確かめることはできないとしながらも、先に引用した「ゾルフ氏は留まった」という言葉の真意について次のように論じている。

ゾルフ氏は遠く隔たれた地（引用者註：東京）におり、質問することができない。ただこの描写には、絶望的な状況の中で自らの地位を放棄する覚悟を見せた閣僚に慰められた皇帝の様子をみてとることができる。しかし、この悲劇が幕引きとなった後、国民のことはともかく、この大臣が留任したことを忘れるわけにはいかなかったのである[9]。

シッファー（Eugen Schiffer）は自叙伝の中で、ヴィルヘルム二世が知人に宛てた私的書簡を引用している。この書簡は 1918 年 11 月 3 日付である。この書簡の中で、ヴィルヘルム二世はゾルフを痛烈な言葉で非難している。

ただ私はこれまで 60 年生きてきて、そのうちの 30 年間は帝位に就いているのです。帝位こそ、私に与えられてしかるべきものです（中略）そして経験！誰が私の代わりをすべきというのでしょうか。あの悪評高きマクス・フォン・バーデン？（中略）彼らとは、目下話し

---

[5] von Vietsch, Eberhard (1964), *Gegen die Unvernunft: Der Briefwechsel zwischen Paul Graf Wolff Metternich und Wilhelm Solf, 1915-1918*, Bremen: Carl Schünemann Verlag.

[6] 中村綾乃（2017 年）「ドイツ領サモアにおける「人種」と社会層－混合婚をめぐる議論を起点として」工藤章・田嶋信雄編『ドイツと東アジア　1890-1945 年』東京大学出版会; 中村綾乃（2019 年）「ゾルフと第一次世界大戦―城内平和と懐疑、植民地の回復―」言語文化共同研究プロジェクト 2018『言語文化の比較と交流 6』大阪大学大学院言語文化研究科。

[7] Kaiser Wilhelm II (1922), *Ereignisse und Gestalten aus den Jahren 1878-1918*, Leipzig: K. F. Koehler.

[8] Kaiser Wilhelm II (1922), S. 237.

[9] *B.Z.am Mittag*, 31. Oktober 1922, BArchK, N1053-111.

合いをしていますが、何度も退位するよう進言してくるのです。彼らは頭でっかちで、誰も本当のところ何をしようとしているのかわかっていないのです。もちろん、何人かは頭のいい者もいます。たとえばあのダヴィット、彼はとても思慮深い人で、ユダヤ人ではありません。違います、違いますとも。彼は兄弟のような交わりを結ぶこともありませんでしたし、またコスモポリタン的な思想とは無縁です。でも彼はとても頭が切れます。あのギースベルツ、カトリック系の労働者協会の指導者であった人物です。このような人々とは一緒にやりやすく、有難いのですが。問題は他の面々です。首脳陣のマクス・フォン・バーデンをトップにして。私が出会った中で、もっともお粗末で嘆かわしく女々しい奴こそ、あのゾルフです[10]。

この書簡の末尾では、「前線で戦う兵士を見捨てて退位するなど論外」と綴っている。ヴィルヘルム二世は退位を促す閣僚や側近に不信を募らせ、憤っていた。また行間からも読み取れるように、通俗的な反ユダヤ陰謀論に囚われていた。なお、この書簡を引用しているシッファーは民主党の創設者の一人であり、マクス内閣では蔵相を務めた人物である。

ゾルフの証言

後に戦間期として位置づけられる 1920 年代、ゾルフは駐日ドイツ大使としての任務に就いていた。この間、東京にいたゾルフのもとにはドイツの新聞社や出版社から回顧録の執筆依頼が舞い込む。しかしゾルフは、ドイツ大使という現職にあること、また 1918 年の革命を総括するには時期尚早という理由から回顧録の出版を断った。

1929 年 5 月、駐日大使の任務を終え、外務省を辞職したゾルフのもとに『ドイチェ・アルゲマイネ・ツァイトゥング』*Deutsche Allgemeine Zeitung* から原稿執筆の依頼があった。同紙では、「あなたが回顧録の中で書かなかったこと！」と題する特集号を組んでおり、第一次世界大戦の終結と革命に関する証言を集めていた[11]。同紙の編集者からの原稿執筆の依頼に対して、ゾルフは固辞する方向で意志を伝えた。

私は数々の貴重な記録や文書、公文書のみならず私的なものも集めており、私の書いた草稿や手記なども保管しています。これらの文書が現代史の記録としてどれほどの価値があるか、歴史が示すことになるでしょう。私はまだ何もこれらの記録を公にしていません。私自身に対する非難に対して、いっさい抗弁してきませんでした。（引用者註：これまでに出版されたドイツ革命に関する）回顧録の大半は 1918 年当時にもう執筆されていたものなのです。これらの回顧録ははっきりとした意図があって書かれているのです。「それは私ではなく、他の誰かです！」と言っているのです。私はこのような回顧録の著者たちと同列に並べられることを恐れています。遅かれ早かれ、私は 1917 年から 19 年にかけての苦難について書いたものを出版するつもりです。その苦難とはわずかの少数派が耐え忍ばなければならなかったものです。今のところは回顧録の執筆に従事したくはなく、まだ元気であるうちは、この時代の機織り機の中で仕事をしたいと思っています[12]。

この時点では回顧録の出版は見送られたが、いずれ出版することを見込み、書簡、日記やメモ、講演記録を保管していた。上述のメッテルニヒと交わした往復書簡を書籍化し、出版する準備も進めていたのである。

1922 年 10 月、一時帰国中のゾルフは知人の政府高官ハイルブロン（Friedrich Heilbron）に宛てた書簡において、連合国との休戦交渉と退位をめぐる皇帝との対話、革命後も外務長官

---

[10] Schiffer, Eugen (1951), *Ein Leben für den Liberalismus*, Berlin: Herbig, S. 136; Vietsch (1961), S. 213.
[11] Klein an Solf, Berlin 4. Mai 1929, BArchK, N1053-12.
[12] Solf an Klein, München 15. Mai 1929, BArchK, N1053-12.

に留任した経緯を記している。この書簡の記載に沿って、再び時計の針を 1918 年 10 月に戻し、ゾルフと皇帝の対話を描き出してみよう[13]。

1918 年 10 月 5 日から革命の日となる 11 月 9 日までの約一カ月の間、ゾルフがヴィルヘルム二世と会い、言葉を交わす機会があったのは三回であった。ゾルフの記憶によれば、一度目は 10 月 8 日か 9 日、二度目はそれから数日後、三度目は二度目に会ってから数日後である。一度目の対話は、自宅から目と鼻の先にある外務省に向かう際、皇帝と偶然すれ違ったために実現した。その際、ヴィルヘルム二世は戦況について楽観的な見通しを述べた。連合国との休戦交渉が難航しているにもかかわらず、現実離れした発言を繰り返す皇帝にゾルフは失望する。この時、ストリンドベリ（Johan August Strindberg）の戯曲に登場するインドラの娘の「人間は何と気の毒な存在か」という台詞がゾルフの頭をよぎった。

二度目の対談は、オイレンブルク伯（August zu Eulenburg）の邸宅で行われた。ヴィルヘルム二世他、オイレンブルク伯、数名の閣僚が同席する場で、ゾルフはウィルソンとの交渉について説明した。説明の後、ルーデンドルフとヒンデンブルク（*Paul von Hindenburg*）を引き離す必要があると述べた。ただし、国民的な人気の高いヒンデンブルクを罷免すれば社会的な波紋が広がるため、ルーデンドルフのみの罷免をヴィルヘルム二世に進言したのである。

二度目の対談の数日後、ゾルフとヴィルヘルム二世はベルビュー宮殿で会する。これが三度目の対談であり、ゾルフにとって最後の皇帝謁見となった。この三度目の対談において、ゾルフはヴィルヘルム二世に退位を促したのである。謁見に訪れたゾルフに対して、ヴィルヘルム二世は開口一番、次のように述べた。

私に感謝しなければなりませんよ。というのも、あなた方の要求をかなえてあげたのですから。作戦は遂行しました。私があのシャム双生児（引用者註：結合双生児）を引き離したのですよ。ルーデンドルフを罷免して、ヒンデンブルクを留任させました。さあ次は、あなた方が皇帝を支える番です[14]。

ヴィルヘルム二世に自ら退位するという考えはなく、再び休戦交渉が遠のいたことを知り、ゾルフは落胆する。その時の心情を次のように綴っている。

シャム双生児！私たちは皇帝を支えなければならないのです。確かにその通りですとも！ずっとそのつもりでやってきたのです。マクス公も彼の側近にしたってそうです！皇帝の一連の言動から、この内閣が皇帝派として、ホーエンツォレルン家の帝位の継続とドイツ帝国の利益のためになさなければならないと思ってやってきたことを、陛下はわかっていなかったのです。またマクス公がそのために一貫して尽力してきたことも正当に評価されず、不愉快にしか思っていなかったことが露呈したのです[15]。

さらにヴィルヘルム二世は、ミュンヘンにいたプロイセン公使トロイトラー（Karl Georg von Treutler）から届いた電報をゾルフに見せた。その電報は、ミュンヘンにおいて皇帝の退位を求める声が高まっていることを伝えるものであった。この電報をめぐっての対話の中で、ゾルフは引導を渡すかたちで皇帝自ら退位するよう促した。このハイルブロンに宛てた書簡の中では、二人の対話が戯曲の台本のように再現されている。

皇帝：これはミュンヘンにいる私の公使が寄こした電報で、バイエルンでは私の退位を求める声が高まっていると書かれているのです。前代未聞です。このフォン・トロイトラー氏を厳しく叱責していただきたい。

私　：どうか陛下！謹んでお願い申し上げますが、彼を叱責するというような命令を取り消して下さい。この厳しい状況の中で、フォン・トロイトラー氏は彼の任務を

---

[13] Solf an Heilbron, Drensteinfurt 9. Oktober 1922, BArchK, N1053-111. この書簡は、フィーチの伝記の付録にも収められている（Vietsch (1961), S. 377-381）。

[14] Solf an Heilbron, Drensteinfurt 9. Oktober 1922, BArchK, N1053-111.

[15] Solf an Heilbron, Drensteinfurt 9. Oktober 1922, BArchK, N1053-111.

全うしたのです。彼は陛下に地方の世論を伝えずにはいられなかったのです。このような電報を打つこと自体、彼にとって苦渋の決断だったのです。

皇帝：私にどうしろというのですか。私は軍人であり、塹壕を見捨てて去っていくことなどできません。そんな馬鹿なことが。このテーブルにある数々の電報を御覧なさい。デルブリュックが見せてくれたもので、津々浦々から送られてきたものです。誰もが私に忠誠を誓っています。国民は私に忠義を尽くしているのです。

私　：陛下、お言葉ではありますが、バイエルンだけではなく、プロイセンでも多かれ少なかれ、そのような声は高まっているのです。ここ数日、我が外務省は皇帝の退位に関する論争をベルリンの新聞が報じないようにさせるために手を尽くしました。

皇帝：なぜ、人々は私の退位を望んでいるのですか。

私　：ウィルソンからの最後の覚書の後、国民全体に不安が広がっています。陛下とともに不利益を被ることになるのか、あるいは陛下なしで平和を享受することになるのか誰もが不安なのです[16]*。*

この対話の最後にヴィルヘルム二世は言葉を発するが、その言葉の中身についてはゾルフ自身の胸の内に留めておきたいとし、この書簡では明かしていない。

外務長官としてのゾルフの任務は、ウィルソンを介して連合国との休戦交渉を進め、ドイツに有利な条件を引き出すことであった。まずゾルフはルーデンドルフ独裁と揶揄された状況を解消し、政治主導を対外的にアピールしようとした。10 月 24 日の閣僚会議の席において、「ルーデンドルフの罷免は米国に好印象を与える」とし、ルーデンドルフの罷免を求め、ヴィルヘルム二世に進言したのである[17]。さらなる体制一新のアピールはヴィルヘルム二世の退位であった。ゾルフは当初、英国をモデルとした立憲君主制を念頭に入れていた。皇帝の退位をヴィルヘルム二世の代に留め、新たに即位する皇帝の政治的権限を制限して、君主制を維持しようとしたのである。しかし、プロイセンの王室を含めた国家制度の一大改革となるため、一朝一夕に結論の出る問題ではなかった。何よりもヴィルヘルム二世自身が皇帝並びにプロイセン王の地位に執着し、退位を拒んでいたのである。

ベルリンで退位をめぐる綱引きが続く中、ヴィルヘルム二世は前線を視察するという名目で大本営が設置されていたスパーに向かった。11 月 8 日、マクス公はスパーにいるヴィルヘルム二世に対して、即刻退位することを求める最後通牒となる電報を打った。この電報の文面はゾルフが原案を起草した。原案の文面は、「内乱を回避できるか否か、陛下の即時決断にかかっています」というものであった[18]。

マクス公の回顧録

マクス公が退位を迫る最後通牒の電報を送った翌日の 11 月 9 日、ヴィルヘルム通りに赤旗の小旗を掲げたトラックの列が現れた。マクス公の回想に沿って、革命の日となった 11 月 9 日に時計の針を合わせ、官邸の動向を追ってみよう。

午前 10 時、ベルリンの街頭で労働者を中心としたデモが起り、デモの波は官邸と帝国議会のある中心地に迫りつつあった。デモに参加していた人々は、「仲間たちよ！撃つな！女性や子供を優先しろ」と書かれたプラカードを持っていた。しかし一部には暴徒化した者もおり、兵士もデモに加わっているという報告が官邸に入った[19]。午後 11 時、マクス公はスパーにいるヴィルヘルム二世に連絡を試みるが、結局本人からの承諾を得られないまま、皇帝の退位を宣言する声明を出した。

皇帝ならびに王は退位することを決断しました。ドイツ帝国皇帝およびプロイセン王の退位と政権移行に伴う問題が解決するまで、帝国宰相はその地位に留まります。エーベルト議

---

[16] Solf an Heilbron, Drensteinfurt 9. Oktober 1922, BArchK, N1053-111.
[17] Vietsch (1961), S. 206.
[18] Vietsch (1961), S. 210.
[19] Max von Baden (2011), S. 359.

員を宰相に任命し、憲法制定のための国民議会の開催に向けて、速やかな選挙告示のための法案を提示する予定です（後略）[20]*。*

正午、このマクス公の声明がヴォルフ通信社（W.T.B.）を通して報じられた。それからまもなく、エーベルト*（Friedrich Ebert）*率いる多数派社会民主党の代表団が官邸を訪れた。マクス公の他、副宰相のパイアー（Friedrich von Payer）、ロデルン（Siegfried von Roedern）、ハウスマン（Conrad Haußmann）、ベルンシュトフ（Heinrich von Bernstorff）、ゾルフが同席し、代表団との会談が行われた。まずエーベルトが口火を切り、「無血革命による政権移行」を強調した。さらに、新政権の派閥構成と人事について次のように述べた。

独立社会民主党が新政権に加わるかどうかについては、まだ彼らの見解が一致しておりません。独立社会民主党が加わることを決めた場合、我々は受け入れるつもりであり、連立を要請することになるでしょう。また我々は、市民階級の意向も受け入れることに異論はありませんので、せめて政府組織の大枠を保持する必要があります。これについてはまだ話し合いが必要でしょう[21]*。*

このエーベルトの言葉に一縷の望みをつないだマクス公は、摂政制度という案を持ちかけた。退位をヴィルヘルム二世個人の問題に留め、新たに即位する皇帝の代から摂政制度を採り入れ、君主制を存続させようとしたのである。

この会談に同席していたゾルフは、マクス公に発言許可を求め、エーベルトに対して質問を投げ掛けた。まず憲法に則って政権を率いる心構えを確認し、その上で君主制の存続についての意向を聞いたのである。このゾルフの質問に対して、エーベルトは次のように答えた。

昨日、同じ質問を受けていたならば、迷うことなく存続するつもりだと答えていたでしょう。しかし今日となっては、まず仲間たちと協議しなければなりません[22]*。*

マクス公が「（君主制の存続が約されていないのであれば）摂政制度という案もなかったことにする」と述べると、エーベルトは「それはもう手遅れです」と答えた。そしてエーベルトの背後で党員が声を揃えて「手遅れだ、手遅れだ」と叫び、シュプレヒコールが起こった[23]。エーベルトはブルジョワ陣営の政治家を排除せず、官僚機構の温存を約していたものの、独立社会民主党の政府への参加が不透明であったために、マクス公から切るカードは限られていった。

午後二時、多数派社会民主党のシャイデマンが帝国議会の前に集まる群衆に対して、共和国の樹立を宣言したという一報が入った。この宣言はシャイデマンのスタンドプレーであり、多数派社会民主党としての宣言ではなかったものの、君主制の存続という可能性は遠のいた。このシャイデマンの宣言が報じられた後、エーベルトは二つの告知を行った。一つ目はドイツ市民に向けた告知で、現宰相マクス公から宰相としての業務を委任されたことを伝えるものであった。二つ目の告知は、官庁と役所、官吏に向けた告知であった。

ドイツ国内の紛争と食糧危機が広がるのを防ぎ、正当な権利としての自主的な意思決定権を貫徹すべく、新政府が政権を担うこととなりました。州都市の官庁と役所、官吏の助力があってこそ、新政府はこの任務を果たすことができます。国政を担うこととなった新しい面々と一緒に働くのはさまざまな問題が伴うでしょう。しかし、彼らの国民に対する愛に訴えたいと思います。国難にあるこの時、一つでも組織が欠けてしまったら、ドイツは無政府

[20] Max von Baden (2011), S. 363-364.
[21] Max von Baden (2011), S. 364.
[22] Max von Baden (2011), S. 368.
[23] Max von Baden (2011), S. 368.

状態となり悲惨なことになるでしょう。辞めるという時が来るその瞬間まで、恐れることなく辛抱強く各々の職務を全うすることで、ともに祖国を助けていただきたいのです[24]*。*

午後5時過ぎ、宰相を辞任したマクス公は官邸を去る前、エーベルトに別れの挨拶をした。マクス公の回顧録には、エーベルトと交わした言葉が綴られている。

エーベルトは私にこう言った。「貴方には何としても残ってもらわなければなりません」と。私は問うた。「どのような目的で残るのでしょう」と。するとエーベルトはこう言った。「貴方には、統治代行者として残ってもらいたいのです」と。最後の瞬間まで一緒にやってきた側近たちからもこのような要請はあった。しかし私はエーベルトにこう答えた。「貴方は独立社会民主党と協定を結ぶつもりでしょう。私は独立社会民主党と一緒にやっていくことはできません」と。扉に向かって歩きながら、もう一度私は彼を振り返った。「エーベルトさん、この国のことをよろしくお願いいたします」と言うと、彼は「この国のために私の息子二人が戦死したのです」と言った[25]*。*

臨時政府としての人民委員政府を率いたエーベルトは穏健派の社会民主主義者であり、当初から無血革命による政権移行を強調していた。交渉によっては、君主制を存続することも可能であったにもかかわらず、ヴィルヘルム二世が皇帝およびプロイセン王としての地位に固執したことで時機を逸することとなった。憲法を改正し、皇帝の権限を制限した上での立憲君主制への移行はゾルフの構想とも重なるものであった。また、革命の急進化に歯止めをかけ、ボリシェヴィズム革命への転化を防ぐという点においても、エーベルトとゾルフが描いた革命後の青写真は同じものだったのである。

3　新生共和国

閣僚の留任

マクス公からエーベルトへと政権移行が実現し、多数派社会民主党と独立社会民主党は連立政府を組織することとなった。多数派社会民主党からはエーベルトとシャイデマン、ランツベルク（Otto Landsberg）、独立社会民主党からはハーゼ（Hugo Haase）とバルト（Emil Barth）、ディットマン（Wilhelm Dittmann）が選出された。

エーベルトの要請に従い、ゾルフを含めた旧政権の閣僚の大半は留任することとなった。新生共和国の人民委員政府に協力した理由について、先述のハイルブロンに宛てた書簡の中で明かしている。この書簡の日付は、1922年10月9日である。

30年以上にわたり私は官職にあり、そのキャリアは皇帝ヴィルヘルム二世統治下のもので、30年以上にわたり皇帝に仕えてきたのです。植民地総督として、また植民長官としても陛下からたびたび援助の手を差し伸べていただき、寵愛と恩恵を受けていたのです。そのような私ですから、革命政権を手放しで歓迎して鞍替えしたわけではないのです。超過激派に譲歩しないために、そして崩壊を食い止めるために当初の助言に従い、外務省の官僚とともに人民委員政府に協力することにしたのです[26]*。*

11月革命から13年後の1931年、メッテルニッヒに宛てた書簡の中で、スパルタクス団の権力掌握を阻止し、革命の急進化を防ぐために外務長官として留任したと説明している。この書簡は1931年10月29日付である。

1918年の秋から冬、あの散々な日々のことは貴方もよく覚えておられるでしょう。伝統を守り、関連している交渉を継続するために、エーベルトは私に外務省に残ることを要請しました。その際、私は外務省の幹部を招集して会合を開きました。私が留任するのであればともに留まり、私が辞任するのであればともに辞めたいという意見で一致しました。あの時私

[24] Max von Baden (2011), S. 373.
[25] Max von Baden (2011), S. 374.
[26] Solf an Heilbron, Drensteinfurt 9. Oktober 1922, BArchK, N1053-111.

が辞任していれば、帝国とプロイセンの政府閣僚は皆辞めたであろうし、彼らとともに指導的地位にあった官吏も一斉に辞めていたかもしれません。スパルタクス団は、すべての官庁を掌握するべく綿密な計画を立てていたのです。そのスパルタクス団が官庁の組織を破壊することを阻止したのではないでしょうか。あの時、多くの保守派と宮廷派は私に感謝していました。ヴィルヘルム通りで、ある名の知れた貴族の女性は私に抱擁して感謝の意を示したほどです。あの時の風潮はそうだったのです[27]。

この書簡を認めていた 1931 年、翌年に控えた大統領選の候補としてゾルフの名前が挙がっていた。当初、現職大統領のヒンデンブルクは高齢のため出馬が難しいとされていた。ヒンデンブルクの支持層であるブルジョワ陣営の政治家と退役軍人は、ゾルフを支持することが見込まれていた。この時のゾルフは、帝国の閣僚が共和国派に寝返ったという批判を避けるべく、革命の急進化を防ぐための防波堤としての役割を強調し、保守派の支持を獲得しようとしていたようである。

1918 年 11 月、帝国を率いてきた閣僚の留任が決まると、人民委員政府の首脳陣からゾルフの退陣を求める声が挙がった。またゾルフは、バイエルンの独立社会民主党を率いたアイスナー(Kurt Eisner)から反革命分子というレッテルを貼られた。アイスナーは、ゾルフのような帝国期の重鎮が留任することで、労働者・兵士レーテの権限が制限され、反革命につながるとし、閣僚人事の刷新を求めた。このような左派からの横やりを遮り、ゾルフの留任を求めたのはエーベルトであった。上述のハイルブロンに宛てた書簡の中で、ゾルフはエーベルトと交わした約束について明かしている。

我々の政治的信念が尊重され、良心に反する行為を強制されないことを条件に留任したのです。これはあの時、エーベルトが約束してくれたことです。この約束は未だに破られていません。前の政府に忠実に仕えてきた官僚が新しい体制のために尽力すること、これを無節操というのは間違いです。かつての体制が崩壊したのは新しい政府の責任である、あるいは今ひどい生活環境に陥っているのは、新しい統治者による愚策の結果であると信じているような者は、我々が 4 年にわたり困難と闘い、史上かつてないほどの凄まじい戦争に負けたということを忘れてしまっているのです。はたから見ているだけで、不平を言うのは愚かなことです。我々は一丸となってこの政府を支えていかなければならないのです。新しい形を好むと好まざるにかかわらず、全体のためにそうすべきなのです。共和国か君主制かという問題ではなく、ドイツという国の問題なのです[28]*！*

人民委員政府と労働者・兵士評議会の二重権力状態、人民委員政権内部からの批判により、ゾルフは連合国との交渉の舵取りができなくなっていく。人民委員政府の中でも、穏健革命派の多数派社会民主党と急進派の独立社会民主党の軋轢が露呈していた。革命の急進化により、バイエルンやラインラントの分離運動が起こり、ドイツは内戦勃発の危機に晒された。

1918 年 11 月 17 日、ゾルフはエーベルトに宛てた書簡を認め、ベルリンの人民委員政府と労働者・兵士評議会の二重権力、これに起因する混乱に策を講じるよう求めた。またゾルフは、ミュンヘン革命を率い、バイエルン自由州の暫定首相となったアイスナーに対して、中央政府として抗議するよう求めた。

革命は、ドイツ問題に対するビスマルク的な解決策が及ばないところまで来ています。連邦議会がこのままの形であれば、もはや存在する意味はありません。中央政府とプロイセン政府の関係も同様です。というのも、もはやプロイセンは国家の主導権を握っていないのですから。主導権を復活させることなどできません。なぜなら、二つの議会制度のもとに一つの政府が機能することなどできないのですから。前提となっていた憲法の形は崩壊しました。これまでの憲法のお飾り的な部分のみならず、土台から粉々に打ち砕かれたのであり、国家という建物全体を新しく建て替えなければならない、そのような状況にあるのです。(中略)連邦国家という解決策をとった場合、難しいのは、それだけで全ドイツ人の半分をまとめあげている大きなプロイセンの問題です。50 年代のラドヴィッツ案に沿って、

---

[27] Solf an Metternich, 29. Oktober 1931, BArchK, N1053-85.
[28] Solf an Heilbron, Drensteinfurt 9. Oktober 1922, BArchK, N1053-111.

プロイセンの自治を限りなく独立に近いものに拡大できるかどうか、同時に南ドイツの州の独立を限りなく自治に近いものに引き下げるべきかという問題を提起し、議論しなければなりません[29]*。*

ゾルフは連合国との休戦交渉を進める上で、ドイツという国家の範囲と制度が明確ではない現状を訴えた。また、連邦国家の中でのプロイセンの位置づけとオーストリアとの合邦の可能性についても、翌年に開催される憲法制定議会に向けて議論するべきとしている。講和条約の締結後、オーストリアとの合邦、すなわち「大ドイツ」への拡大も選択肢の一つとなるように法的な土台を整えておくべきと考えていたのである。

「ドイツの終わり」

革命後の方向性について多数派社会民主党、独立社会民主党、スパルタクス団、それぞれが異なる青写真を描いたまま混乱が続いた。1918 年 11 月 25 日、議会の壇上に立ったゾルフは演説を行った。なお議場にいたコッホ＝ウェザー（Erich Koch-Weser）は、この 11 月 25 日のゾルフの演説は「アンシャン・レジーム」を彷彿させるものだったと日記に記している[30]。

一定の世代の人々は、ドイツ国民の敗北という結果を乗り越えるまでには至らないのです。革命がもたらす転換は、まさに国民としてのドイツ人と一国の経済に深刻な影響をもたらそうとするものです。(中略)皆様、私は革命を非難しているのではありません。というのも私は、革命が作り上げたドイツ共和国の幸先のよい未来を信じているからです。私の提案によって、最近よくそういわれるのですが、革命の成果が台無しになる、そのような結果を望んではおりません。私は、ドイツの統一が気泡に帰してしまうのではないかと心底懸念し、危惧しながら、あなた方に訴えているのです。皆さま、ドイツの未来はあなた方の手に託されています。崩壊の危機に瀕したドイツが統一できるのか、平和を達成できるのかは、あなた方の決定にかかっているのです。ドイツの統一と平和の達成、この二つの大きな課題があなた方の目前に突きつけられているのです。今なさなければならない施策を先送りにするようなことがあれば、崩壊の危機に瀕したドイツに未来はなく、あなた方の話し合いに委ねられたこの国の歴史は、「ドイツの終わり」(Finis Germaniae)という言葉で終止符を打つことになるでしょう[31]*。*

ゾルフは、革命の急進化に警鐘を鳴らし、ボリシェヴィズム革命への転化を阻止し、連合国との交渉を進めていこうとした。そのために、自らが率いる外務省の独立性を確保することを提言した。人民委員政府のメンバーが水面下でソ連との関係を深めていることを警戒し、牽制していた。ソ連のボリシェヴィキとの蜜月は社会主義革命の呼び水となり、米国や英国、フランスとの関係悪化を招き、来るべき講和条約の締結にも影響を及ぼしかねないと考えていたのである。

この演説から約 2 週間後、1918 年 12 月 9 日付のエーベルト宛の書簡において、ゾルフは人民委員政府のメンバーとソ連との癒着を糾弾し、事実確認を求めた。

ヴォルフ通信社の告発記事によれば、元駐ベルリン公使である人物がボリシェヴィキのプロパガンダ誌を配布しています。この雑誌の配布のみならず、武器の調達まで考えているのです。このプロパガンダ誌が独立社会民主党を介して広まっているかどうか、調査して下さい。先述の報道によれば、武器の購入について、自動拳銃が 159 丁、ブローニング式自動小銃と自動装填式拳銃が合わせて 28 丁、この他に銃弾約 2 万 7 千とされているが、この数は正確ではありません。ここで報じられているのは、ロシアへの輸出分のみです。ご承知の通り、買い付けて、現在大臣職に就いているバルトに引き渡された分の方がその数をはるかに上回ります[32]*。*

ルーブル通貨によってドイツ革命が進展しているのが事実であれば、見過ごすことができないとし、ゾルフはエーベルトに詰め寄った。また、ボリシェヴィキと人民委員政府のメンバーの結びつきを示す証拠となる電報を入手し、エーベルトに示した。その電報は、ソ連外相のチチェーリン（Georgy

---

[29] Solf an Ebert, Berlin 17. November 1918, BArchK, N1053-59.
[30] Vietsch (1961), S. 224.
[31] Schluß der Rede des Staatssekretärs Dr.Solf auf der Reichskonferenz, 25. November 1918, BArchK, N1053-59.
[32] Solf an Ebert, Berlin 9. Dezember 1918, BArchK, N1053-60.

Chicherin）が送信者となっており、宛先はハーゼとバルトであった。この電報には、革命が成功したことに対する祝辞とともに、ハーゼとバルトにソ連の人民委員会議から財政的援助がなされたことが書かれていた。エーベルトはハーゼを官邸に呼び、この電報の真偽を確かめた。官邸において、エーベルトとゾルフ、ハーゼが対面し、ゾルフがチチェーリンからの電報を読み上げた。顔色を変えたハーゼは、このような場は公正な審議の原則に反すると怒鳴ったが、電報に記載されている内容については否定しなかった。ゾルフはハーゼとバルトの解任を求めたが、エーベルトは躊躇した。解任の要求が受け入れられなかったことに失望し、この日の帰宅後、ゾルフは自室で辞表を認めた。

エーベルトと袂を分かつことになったのはゾルフにとって痛恨の極みであり、「数週間前のマクス公との決別よりも、はるかに辛いもの」であった。10 年後の 1928 年 8 月 28 日、ゾルフはエーベルトに辞表を突きつけた時のことを振り返っている。

こうして私は官職を去ることとなりました。エーベルトと最後に衝突したことで、辞めざるを得なかったのです。彼のような素晴らしい人と一緒に働きたいと思っていただけに、悲しみもひとしおでした。当時、独立社会民主党なしではエーベルトはやっていけなかったのです。まだあの時は、彼らと一緒にやっていくのは無理で、耐え難い状況だということに気づいていなかったのかもしれません。このようなことは人間関係にはよくあることで、私に身を引かせるしかなかったのです。それでもエーベルトとの交友関係は続きましたし、駐京ドイツ大使に任命してくれことに何よりも感謝しているのです[33]。

ゾルフが辞任を表明し、エーベルトに宛てた辞任届を認めたのが 12 月 9 日、この辞任届が受理されたのが 12 月 13 日であった。帝国最後であり、同時に共和国最初の外務長官の在任期間は約 2 か月であった。しかし、ゾルフはエーベルトと決別したわけではなかった。 辞任届を出した翌日の 12 月 10 日、エーベルトに宛てて私信を認めている。この書簡の中では、ロシア革命を引き合いに出して人民委員政府の問題点を指摘している。

ケレンスキーが中心となった革命は、机上の学問や議会に重きを置いていたゆえ、機を逸してしまったのです。閣僚も憲法制定議会も労兵レーテを追いやることはできなかったのです。レーニンはラディカリズムのみならず、独裁という論理をもって、ケレンスキーに勝ったのです。最初に樹立した革命政府が、憲法制定議会と並んだ、あるいは上位にある臨時的な憲法によって、暫定的な大統領を選んでいたら、ボリシェヴィズムはロシアで必要とされることすらなかったでしょう[34]。

ゾルフの辞任を引き換えとして、エーベルトは独立社会民主党に譲歩するかたちとなった。しかしゾルフの辞任から一週間後、ベルリンに駐屯していた人民海兵団の暴動の鎮圧をめぐって独立社会民主党と対立し、独立社会民主党員のメンバーは人民委員政府から離脱した[35]。

4　新党の旗揚げ

11 月革命から一年後の 1919 年 11 月 11 日、ベルリンを離れていたゾルフはメッテルニヒに宛てた書簡の中で、左右両翼に揺さぶられる続ける共和国政府の現状を分析している。

なかんずく、今の政府は大衆を支配する力はなく、多数派社会民主党の支持者すら意のままにできずにいます。おそらくは、左傾化に歯止めがかからないのでしょう。革命派の急進主義者は自らカードを切ったのです。去年の 11 月 9 日、エーベルトが王子（バーデン公マクス）に放った言葉を今もはっきりと覚えています。「今の政権は国民の信頼を失っています。お言葉ですが、私は信頼を得ています」と言ったのです。今や、その信頼はどこへ行ってしまったのでしょう。豪華な空間でフロックコートを纏った労働組合のリーダーは大衆を遠ざけてしまったのです。ただ、そのような彼であっても市民の輪の中に馴染んでいく勇気はないのです。一方、右寄りの民主主義を標榜する者からは、帝政を崩壊した者として嫌われているのです。私からしてみれば、彼は大してぶれてはいません[36]。

---

[33] Vietsch (1961), S. 381-382.
[34] Solf an Ebert, Berlin 10. Dezember 1918, BArchK, N1053-59.
[35] ゲルヴァルト, R.（大久保里香・小原淳・紀愛子・前川陽祐訳）（2020 年）『史上最大の革命』みすず書房、242-245 頁。
[36] Solf an Metternich, Zingst b. Nebra Bez. Halle, 11. November 1919, BArchK, N1053-140.

さらにビスマルクからベートマン＝ホルヴェーク（Theobald von Bethmann Hollweg）、マクス公、ヘルフェリヒ（Karl Helfferich）、エーベルトまでの政治家を総括した上で、語気を強め、自らの政治構想を語っている。

民主主義への入り口に私は立っているのです。けっしてたやすいことではありませんが、今まさに私は骨の髄まで民主主義者であるという意識を持っています。しかし、それは政治的な表明ではなく、世界観の問題なのです。（中略）帝政期の同僚の大半が私の手本に従っていてくれたならば、民主党が大所帯の中道市民政党となっていたかもしれません。社会民主主義の急進化に抗うためには、そのような政党が必要だったのです。デルブリュック、ヴァーンシャッフェ、カルドルフ、ポサドウスキー、カールともども勢ぞろいで民主党に結集すればよかったのです。しかし残念なことに、もはや民主党は私が描いていた青写真とは異なるものになってしまいました。それにフリードリッヒ・ナウマンも亡くなってしまいました。ここに名前を挙げた面々は、ぞれぞれの政党に不満を募らせており、感極まった党員の議場での発言、ドイツの新聞と日刊紙の紙面に飾られる文言に恐々としなければならないのです[37]*。*

ゾルフはメッテルニヒに対して、旧帝政派のマクス公やベートマン＝ホルヴェークから穏健な社会民主主義者のエーベルトまでの受け皿となるべき中道政党の必要性を説き、自ら主軸となって新党を旗揚げする覚悟を明かしたのである。

1922 年 10 月、駐日大使であったゾルフは、ドイツでの休暇を終え、米国経由で日本へ戻ることとなった。ワシントンでは、米国大統領のハーディング（Warren Harding）と会談する予定となっていた。米国に向かう船上で、ヤゴー（Gottlieb von Jagow）に書簡を認めた。

ドイツを離れる前、エーベルトと長時間の会談をしました。貴方が同席できなくて残念でしたが。徹頭徹尾、彼は政治家です。1918 年から 1919 年、過激な急進主義とボリシェヴィズムという岩礁に乗り上げずに切り抜けることができたのは、エーベルトのおかげと言わざるを得ません。彼もまた、私のユートピア的なジェントルマンの政党の幹部となるでしょう。エーベルトがかつて皮革職人であったこと、なぜ今になって改めて話題にするのでしょうか。ジョゼフ・チェンバレン、彼は偉大なカメレオンです。帝国主義者になった一介のイギリス人です。チェンバレンはバーミンガムで政治家へとのし上がる前は、靴職人の息子で父親の徒弟だったのです。保守党党首のボナー・ローは鉄鋼の仲介業者でしたし、ディズレーリはユダヤ人少年にすぎなかったのですから[38]*。*

この書簡では、自らが旗揚役となる新党を「ジェントルマンの政党」としている。ただし、このジェントルマンとは出身や社会階級によって規定されるものではなかった。というのも、皮革職人から大統領となったエーベルトこそが、この「ジェントルマンの政党」の指導者の一人になるべきであるとしているからである。この書簡は、英国の保守派の政治家と出自を引き合いに出し、「人間とは何と悲しいものか」という文言で締めくくられている。

1923 年 3 月、ゾルフは再びハイルブロンに宛てて書簡を認めた。この書簡からは、駐日大使という「孤立したポスト」にいることへの焦燥感がうかがえる。

あと何年間まだまだ現役でやっていけますし、日本ではなくて、もっと私であれば貢献できるというポストに就かなければと、ますます強くそう感じているのです。私は友好的な日独関係を構築しましたし、共感を得てきました。摩擦が絶えない中、私自身のみならず、ドイツに対する信頼を勝ち取ることができました。日本のみならず、他国の外交団からもです。我々に対する共感と好感は増してきています。これ以上、私にできることはありませんし、他の人であっても同様です。広く浸透している共感を政治的に利用することなどできません。日本政府は、多大な難題と葛藤していますが、それらの問題

[37] Solf an Metternich, Zingst b. Nebra Bez. Halle, 11. November 1919, BArchK, N1053-140.
この書簡は、フィーチの伝記の付録にも収められている（Vietsch (1961), S. 382-386）。
[38] Solf an von Jagow, an Bord S.S. Reliance 20. Oktober 1922, BArchK, N1053, Nr.114.

を解決できるような段階にはありません。ワシントン会議は、この国にとっては必要な変更を加えただけの小ヴェルサイユみたいなものです[39]*。*

この書簡では、日本にとってのワシントン会議を「小ヴェルサイユ」と表現している。ゾルフは、この「小ヴェルサイユ」にドイツは介入するべきではなく、大使として担うべき役割も少ないと考えていた。自らの政治的手腕と経験、人脈を生かすことのできるポストに就くことを望み、駐米大使ないし駐英大使としてのポストを得るべく、ベルリンに働きかけていた。そもそも、ヤゴーに宛てた私信では「政治はロンドンやパリ、ワシントンを中心に動いている」と綴っていたのである[40]。

1925 年 2 月 28 日、東京にいたゾルフはエーベルト死去という報に接する。翌 3 月 1 日付の知人女性に宛てた私信の中で、次のように綴っている。

昨晩、エーベルトが亡くなりました。困難を極めた時期、一番近くで彼を見てきましたから、それなりに彼のことをよく理解していましたし、評価していたのです。誰が後を継ぐのでしょうか。この破局についてドイツ人ではない人々が物申す姿を目にし、否応なく耳に入ってきてしまうのが何とも悲しいのです。ドイツに思いを馳せており、この孤立したポストでできること以上に、もっと力になりたいのです。政党を左派から右派まで集めて一緒にすると的を絞ることができず、うまくいきません！命中したとしても、たまさか命中しただけです。未だに、人類史上かつてない戦争に負けたことをわかっていないドイツ人がいるのですから。また一方では、そのことを忘れてしまったような人もいるのですから。残りの三分の一のドイツ人は小心者なのです[41]*。*

ゾルフにとって、既存の政党は一長一短であり、フィーチの言葉を借りれば「政党ホームレス」であった[42]。革命直後、進歩人民党と国民自由党の党員によって結党した民主党がゾルフの政治的立場にもっとも近かった。しかし、民主党の党内分裂を目の当たりにし、自ら新党を立ち上げる構想を持つようになる。ゾルフの新党構想の中で、エーベルトは支柱というべき存在だったのである。

5 おわりに

ゾルフは外務長官を辞任後も植民長官の地位には留まったが、翌 1919 年 2 月、ベル（Johannes Bell）が植民長官に任命されたことに伴い、植民長官を辞任した。海外領土の放棄が課せられたヴェルサイユ条約が締結されるまで、ゾルフはウィルソン主義の下での植民地構想を主張していた。帝国期の海外領土、その中でも中央アフリカの回収に固執していたのである。しかし、ヴェルサイユ条約の批准が決まると、植民地の回復を唱えることもなくなった。右派による植民地回復キャンペーンにも苦言を呈するようになる。植民地の回復ではなく、国連の委任統治という協働作業に加わり、英国やフランスなど他の植民地帝国との関係回復につなげるべきとし、主張を変えていく。

1933 年以降、ナチ・プロパガンダの中で、植民地事業の牽引役として自らの名前が挙がることにも不快感を持つようになる。1935 年 3 月、ヴィルヘルムスハーフェンに海軍博物館を建設する話が持ち上がった。同館は帝国期の植民地に関する展示を企画しており、植民地総督と植民地長官を歴任したゾルフに対して、直筆のメッセージの提供を求めた。しかし、ゾルフはメッセージを寄せることを拒んだのである[43]。

1918 年 12 月、ゾルフは革命の急進化を求めた独立社会民主党と対立し、反革命派のレッテルを貼られ、外務長官を辞任することとなった。革命から 2 年後、ゾルフは駐日大使に任命される。市民階級に属しながら駐日大使となった最初の事例となった。ゾルフ以前の歴代駐日公使ないし大使は、爵位や貴族の称号を持っていたのである[44]。共和国政府の左派からは反革命派とされたゾルフであったが、保守的な傾向の強い日本在留ドイツ人からは、共和国から派遣されたリベラルな大使と目され、反感を買った。東京のドイツ東洋文化研究協会（OAG）では、会員が帝政期の赤、白、黒の三色

---

[39] Solf an Heilbron Tokio 16. März 1923, BArchK, N1053-111.
[40] Vietsch (1961), S. 247.
[41] Vietsch (1961), S. 261.
[42] Vietsch (1961), S. 225.
[43] Solf an Ronneberger, 13. März 1935, BArchK, N1053-43.
[44] Hans Schwalbe / Heinrich Seemann (Hrsg.) (1974), *Deutsche Botschafter in Japan 1860-1973*, Tokyo: Deutschen Gesellschaft für Natur - und Völkerkunde Ostasiens.

旗に固執し、共和国の赤、金、黒の三色旗を掲げることを拒否したことで、ゾルフが介入する事態となった。また大使館の人事をめぐり、ゾルフに対するリコール運動も起きた。このような騒動を受け、ゾルフ自身も「社交クラブのバーに入り浸る日本在留ドイツ人」に辟易するようになる[45]。

駐日ドイツ大使の職を最後として外務省を辞職したが、その後もリットン調査団のドイツ代表委員、ヒンデンブルクの後継となる大統領の候補としてゾルフの名前が挙がった。しかしリットン調査団については、元駐日大使という経歴と日本の政財界との人脈から親日的な傾向があるとして候補から外された。1932 年のドイツ大統領選では、時の首相ブリューニング（Heinrich Brüning）と共和国派がヒトラー（Adolf Hitler）の当選を阻止するため、老齢のヒンデンブルクを担ぎ出した。もともとヒンデンブルクの支持層を射程に据え、出馬する予定であったゾルフの出番はなくなった。

大統領選への出馬を見送った後、反ヒトラーの結集軸となる中道政党の結党に向けて動いた。しかし、エーベルトが左右両翼から攻撃を受け、揺さぶられ続けたのと同様、ゾルフも自らの政治的立ち位置を定めることができなかった。ブルジョワ陣営の政治家や退役軍人の中に根強い反ユダヤ主義とナショナリズムへの傾倒に対して批判的であったことから、手を組める保守派も限られた。さりとて、急進的な革命派であった社会民主党の左派とは折り合いが悪く、中央党とその支持基盤は植民地総督時代からの論敵であった。革命後の人民委員政府が左右両翼を包含しようとしたことが混乱の原因と考えていたことから、ゾルフは小数精鋭の政党を結成しようとした。保守、右派陣営とも袂を分かち、中央党、社会民主党の左派と共産党の支持基盤を排除し、彼らとの共闘を避けたことで、ゾルフの新党結成は時機を逸し、反ヒトラーの結集軸は瓦解してしまう。

1918 年 11 月 25 日、アンシャン・レジームと酷評された演説の中で、ゾルフは「ドイツの終わり」（Finis Germaniae）と言い放ったが、15 年後の 1933 年 1 月 30 日、同じ言葉を口にすることとなる。その日、ヒトラーの権力掌握を祝う党員の松明行列がゾルフの自宅があるアルゼン通りを横切ったのである。窓際に座っていたゾルフは、通りを見下ろしながら「ドイツの終わり」と呟いた[46]。

---

[45] スヴェン・サーラ／クリスチャン・W・シュパング（ヤコビ・茉莉子訳）（2011 年）「第一次世界大戦後の日独関係におけるドイツ東洋文化研究協会（OAG）の役割」杉田米行編『1920 年代の日本と国際関係』春風社、99-100 頁；Vietsch (1961), S. 243-252.

[46] Vietsch (1961), S. 325.

■ 文書館史料

Bundesarchiv, Koblenz (BArchK), N1053 (Nachlass Solf).

■ 文献

（欧文）
Hempenstall, Peter J / Mochida, Paula T. (2005), *The Lost Man - Wilhelm Solf in German History*, Wiesbaden: Otto Harrassowitz Verlag.
Japanisch-Deutsches Zentrum Berlin, Japanisch-Deutsche Gesellschaft（ベルリン日独センター，日独協会） (2005) *Brückenbauer: Pioniere des Japanisch-Deutschen Kulturaustausches*（日独交流の架け橋を築いた人々）, München: Iudicium.
Kaiser Wilhelm II (1922), *Ereignisse und Gestalten aus den Jahren 1878 – 1918*, Leipzig: K. F. Koehler.
Max von Baden (2011), *Erinnerungen und Dokumente: Reihe Deutsches Reich VIII/I-II*, Hambug: Severus Verlag.
Hans Schwalbe / Heinrich Seemann (Hrsg.) (1974), *Deutsche Botschafter in Japan 1860-1973*, Tokyo: Deutschen Gesellschaft für Natur - und Völkerkunde Ostasiens.
von Vietsch, Eberhard (1961), *Wilhelm Solf. Botschafter zwischen den Zeiten*, Tübingen: Wunderlich.
von Vietsch, Eberhard (Hrsg.) (1964), *Gegen die Unvernunft: Der Briefwechsel zwischen Paul Graf Wolff Metternich und Wilhelm Solf, 1915-1918*, Bremen: Carl Schünemann Verlag.
Schiffer, Eugen (1951), *Ein Leben für den Liberalismus*, Herbig: Berlin
Tunnat, Frederik D (2014) *Die Deutsche Gesellschaft 1914 und ihr Gründer,* Berlin: Edition Vendramin.

（邦文）
スヴェン・サーラ／クリスチャン・W・シュパング（ヤコビ・茉莉子訳）（2011 年）「第一次世界大戦後の日独関係におけるドイツ東洋文化研究協会（OAG）の役割」杉田米行編『1920 年代の日本と国際関係』春風社。
ゾルフ、ヴェー・ハー、長田三郎訳（1926 年）『将来の植民政策』有斐閣。
竹中亨（2018 年）『ヴィルヘルム 2 世』中公新書。
中村綾乃（2017 年）「ドイツ領サモアにおける「人種」と社会層－混合婚をめぐる議論を起点として」工藤章・田嶋信雄編『ドイツと東アジア 1890-1945 年』東京大学出版会。
中村綾乃（2019 年）「ゾルフと第一次世界大戦—城内平和と懐疑、植民地の回復—」言語文化共同研究プロジェクト 2018『言語文化の比較と交流 6』大阪大学大学院言語文化研究科。
成瀬治・山田欣吾・木村靖二（編）（1997 年）『ドイツ史 3』山川出版社。
日独交流史編集委員会（2013 年）『日独交流 150 年の軌跡』雄松堂書。
ゲルヴァルト, R.（大久保里香・小原淳・紀愛子・前川陽祐訳）（2020 年）『史上最大の革命』みすず書房。